

ミャンマーで共同研究

岡山大



岡山大学院医歯薬学総合研究科
で学ぶミャンマー人留学生(左)

先進国の医学がいくら進歩しても恩恵の届かない国がある。ミャンマーは軍事政権であるため、それを問題視する先進諸国から援助を止められ、医学も発展から取り残されている。医療人材不足も深刻で、平均寿命は東南アジア全体より7歳も短い。この厳しい事態に、岡山大医学部を中心にした関係者から医療支援の手が差し伸べられている。

岡山大は1996年からミャンマー保健医療当局や学術機関と共同研究を実施してきた。とりわけ問題視されたのは売血頼みの血液確保体制。戦後間もない日本と同様の状態で、ウイルス感染血液によるC型肝炎のまん延と、それに伴う肝臓がん患者の多発を引き起こしていた。研究結果を受け、ミャンマー政府は2000年に献血による血液供給を開始。岡山大は肝炎ウイルスのスクリーニング検査導入を支援した。研究がきっかけとなってJICA（国際協

力機構）の移動献血車無償支援が実現、その際の技術指導や医学部、大学院医歯薬学総合研究科などへ約20人の留学生を受け入れるなど、ミャンマーの医療技術向上、人材育成に協力してきた。

だが03年、軍事政権が民主化運動指導者アウンサン・スー・チーさんを軟禁し、事態が一転。「原則として支援を凍結する」との日本政府方針によりJICA事業は中断されたが、岡山大は共同研究の形で支援を継続した。今も、ミャンマー国立医学研究所などを拠点に、肝炎やマラリア、結核などの感染症を研究している。

共同研究のリーダーを長年務めた岡田茂前医学部長は「生命の危機が存在する状況にあっては、支援を止められなかった。大学には学問の自由という武器がある。政治や国境の壁を越えられる」と話している。

（藤岡慎吾）

2006. 7. 12 山陽新聞